＜無言館＞からのメッセージ

窪島誠一郎 館主 は語る

～戦没画学生たちが いまに遺す いのちの叫び～

生を断ち切られるまで命をかがやかせてキャンパスに向かい続けた戦没画学生達の、いまに残る無言の作品群。そこから聞えてくる純粋なまでの平和・いのち・人を愛する思い・アートへの熱情を、この国の今日を見るとあらためていっそう強く受け止めねばならないと思います。

「無言館」には、木更津市生まれの興梠（こうろぎ）武さんや、島根県生まれで館山砲術学校出の小柏太郎さんらの作品も展示されています。

戦時下の安房地域には、館山海軍航空隊や洲ノ埼海軍航空隊、館山海軍砲術学校をはじめ、ロケット特攻機「桜花」下滝田基地（現南房総市三芳地区）や、水上特攻艇「震洋」基地（現館山市西岬地区）、特殊潜航艇「海竜」「蛟竜」「回天」を配した第１特攻戦隊第 18 突撃隊の本部基地（現鋸南町岩井袋）など、いのちを武器に変える非情な特攻基地が多数存在していました。

安房の地は、まさに学徒動員で特攻兵となった戦没学生たちが、青春と才能を散らすために過ごした厳しい思い出の地に違いありません。若者が自由に絵筆を持てず、いのちを引き裂かれた戦争という時代に戦没画学生たちが遺していった遺作から伝わるこころの叫びを、軍都であった館山の地で、平和に今を生きる私たちはどう受け止めるべきか考えてみたいと思い、このたび「無言館」館主である窪島誠一郎さんをお迎えしての講演会を企画いたしました。

日　時：２００９年７月１０日（金）18：00～
会　場：千葉県南総文化ホール（小ホール）
主　催：窪島誠一郎氏講演会実行委員会

実行委員長：溝口七生　　事務局長：橋本芳久　　副事務局長：齊藤陽子
実行委員：　愛沢伸雄、池田恵美子、田中房江、橋本新子、
早川厚子、船田正廣

窪島誠一郎氏を迎えて

窪島誠一郎氏講演会　実行委員長　溝口七生

20 数年前の夏、上田交通別所線の無人駅から徒歩で田舎道の坂を登り、信濃デッサン館を訪ねた時に受けた強い印象は今でも鮮明に残っています。展示されていた夭折の画家達のデッサン群に強く心を揺さぶられると同時に、とても素晴らしいけれど採算が難しいと思われるこのような私設美術館をつくったのはどんな人なのか興味を持ちました。窪島誠一郎というお名前は分かっていましたが、経歴など詳しいことはほとんど知りませんでした。

今年４月８日、年金者組合安房支部の仲間達と共に「無言館」「信濃デッサン館」「槐多庵」「傷ついた画布のドーム」を訪ねました。無言館には２度目、デッサン館には３度目の訪問でしたが、今回も、多くの衝撃や感銘を覚えました。また、この間、何冊かの著作によっても窪島氏のことをいろいろ知るようにもなっていました。

「窪島氏の講演会を安房の地で……」という橋本芳久氏（実行委員会事務局長）からの提案（昨年秋）に大賛成し、実現することが決まって大喜びし、実行委員長を務めることになりました。

まず、非常に多忙な日程をさいて講演を引き受けて下さった窪島氏に深く感謝しています。同時に、実行委員の皆さんの努力が積み重ねられる中で、賛同者、共催団体、後援団体が続々と参加して下さり、盛り上がった状況で窪島氏を迎えることができることに深く感謝し、喜んでいます。

準備の中で、いろいろな期待、希望、提案の声も聞きました。しかし、講演内容などについて、窪島氏に私達の方から要望や注文をお願いすることはしませんでした。

「無言館」の作品や遺品の数々からのメッセージ、そして窪島氏の講演や著作からのメッセージを、出来るだけ多くの人にそのまま受け取ってほしいと願っています。

そのメッセージの受け取り方・受け止め方は人によって様々だと思います。私は画家として、また、いくつかの平和展のメンバーの一人として、窪島氏の著作、信濃デッサン館、無言館から、多くの、重いメッセージを受け取り続けてきましたし、今回の講演でさらにそれが深まることと思っています。

この講演会に参加してくださった皆さんも、すでに無言館に行ったことのある方、これからぜひ行きたいと考えている方、無言館や窪島氏のことを今回初めて知ったという方など、いろいろだと思います。美術や平和に関わりのある方もない方もいると思います。

今回の講演を機に、更に多くの方が、窪島氏の著作を読み、無言館を訪ね、自分なりのメッセージを受け続けていってほしいと願っています。

「無言館」

長野県上田市の周りを山々で囲まれた田園地帯の丘陵地の頂に、中世ヨ―ロッパ僧院を思わせる十字の建物があります。それが、窪島氏の設計による「無言館」です。画家で自らも出征経験があり、また、美術学校の仲間を戦争で喪った画家野見山暁治さんとともに、日本各地の戦没画学生のご遺族のもとを尋ね、遺作を集め、3,000 人以上の協力者からのご芳志などにより平成 9 年 5 月 2 日に開館されました。

ここには先の太平洋戦争や日中戦争で画家への志半ばで草でもむしりとられたように戦地に駆り出され、心ならずも絵筆を銃に変え、戦場のツユと消えねばならなかった悲運の画学生たちの遺作や遺品が展示されています。館主の窪島誠一郎氏は自著の中で、「無言館」建設への思いを次のように述べています。

…「無言館」建設を思いたった私の心の奥には、戦争にとことん苦しめられ、口にいえぬ辛酸をなめながら貰い子の私を慈育し、報われぬまま先年この世を去った両親への哀れみがあったと思う。－中略－。私は死んでいった画学生のどの絵にも、溢れるような存命の歓びと肉親への感謝を発見して瞼がぬれたのだった。親が生きているうちに、何一つ孝行せず、すべてを子の手柄のように考えてきた自分の姿をふりかえってやるせなかった。同時に、父や母の背後にあった「戦争」を一顧だにしようとしなかった自分がなさけなかった。全国を巡って戦没画学生の遺作をあつめることは、そんな私自身の五十数年にわたるおもいがあがりの暦をもう一度見つめなおすきっかけになるのではなかろうか。…

「無言館」は異色の美術館としてその存在が注目されるようになり、全国から訪れる人は年間 10 万人にも達しているといわれ、平成 20 年 9 月、隣接地に第二展示館「傷ついた画布のドーム」がオープンしました。

窪島　誠一郎　（くぼしま せいいちろう）

1941 年東京生まれ。 現在 信濃デッサン館「無言館」館主、作家。

印刷工、店員、酒場の経営などを経て、64 年に東京世田谷区に小劇場の草分けとなる「キッド・アイラック・アート・ホール」を設立。79 年、長野県上田市に夭折画家のデッサンを展示する私設美術館「信濃デッサン館」設立。97 年、同館隣接地に戦没画学生慰霊美術館「無言館」を設立。08 年 9 月第二展示館「傷ついた画布のドーム」を設立。

執筆活動では、ＮＨＫでテレビドラマ化された、実父 水上 勉との再会を綴った『父への手紙』(筑摩書房)のほか、『傷ついた画布の物語』(新日本出版社)、『無言館の坂道』『雁と雁の子』(平凡社)など多数。

第 46 回産経児童出版文化賞、第 14 回地方出版文化功労賞、第 7 回信濃毎日新聞社賞。「無言館」の活動で第 53 回菊池寛賞を受賞している。

～安房に残る「無言」の歴史遺産と芸術たち～

ＮＰＯ法人安房文化遺産フォーラム

ホームページ　http://bunka-isan.awa.jp/

千葉県南部の南房総・館山において、甚大な被害を受けた関東大震災の直後から湾を埋め立てて開かれた館山海軍航空隊では艦上攻撃機のパイロットが養成され、洲ノ埼海軍航空隊では兵器整備兵が養成され、館山海軍砲術学校では陸戦部隊や落下傘部隊が養成されていった。戦争末期には本土決戦に備えた陣地や特攻基地が次々と造られ、戦争において重要な役割を担っていたこの地にも、学徒動員に伴って多くの画学生が従軍していただろうと思われる。戦争の記憶を雄弁に物語る「もの」たちは、足もとの地域にたくさん残っている。ふと足をとめ、先人たちがこめた平和への希求に耳を傾けてみよう。

終戦直後には本土で唯一「4日間」の直接軍政が敷かれ、戦後日本のスタートの地となったことも、近年まで忘れられていたことである。右の写真は、ミズーリ号敗戦調印式の翌9月3日に、アメリカ占領軍3,500 名が館山に上陸したシーンである。

◆米占領軍上陸シーン動画フィルム上映会

日時：2009 年 9 月 3 日 13:30～　会場：館山地区公民館

戦争を乗り越えてよみがえった校長先生の胸像　北村西望作

千葉県立安房水産学校（後の安房水産高校）では、昭和8年に創立 10 周年を記念し、水産教育に情熱を傾けられた初代笹子治校長の胸像を同窓会が建立した。制作は東京美術学校教授の北村西望に依頼した。昭和 18 年、戦争用原材料の不足から金属供出が命じられたが、尾谷茂、須田好衛両先生の努力により石膏型が残され、昭和 37 年に再び同窓会によって再建されて現在に至る。

北村西望は、戦後、長崎の平和記念像の製作で著名な彫刻家であるが、戦時中は自らの作品が次々と供出されて兵器と化してゆくことを嘆いて美術学校を退官し、「銅像救出委員会」を結成して供出反対運動を行なったという。

昨春、同校は館山高校と統合され、館山総合高校と名を変えた。型を残した教諭らの想い、再度建立した同窓会の想い、北村西望の想い…などなどを語り継ぎ、館山の平和記念像として後世に残したいものである。

供出をまぬがれた供養レリーフ　長沼守敬作

日本で初めてイタリア・ベネチア王室美術学校に留学して、正統的な洋風彫塑技法を会得し、東京美術学校塑造科を開いた彫刻家・長沼守敬は、引退後の晩年を館山の地で過ごした。大正 12 年に起こった関東大震災で旧館山町は 99％壊滅し、長沼が懇意にしていた老婦人と2歳の孫娘も亡くなった。これを偲んだ長沼は、北下台の墓石に2人の供養レリーフを制作した。軍都・館山において、金属供出をまぬがれた貴重な作品である。当時、長沼が暮らした城山ふもとに残る住宅の保存が望まれる。

国連本部に贈られた万霊供養と平和祈願の錦綴織

遠藤虚籟作

山形県鶴岡生まれの遠藤虚籟は、画家を志して太平洋画会研究所で中村不折に師事。貧困と挫折のなか、信仰に導かれ、錦綴織と出会う。関東大震災を機に館山へ定住し、弟子となった和田秋野とともに制作に励む。昭和15年、絹織物などの奢侈品等製造販売禁止令が出されたなか、虚籟の錦綴織は芸術保存の観点から制作を許可された。自分だけ特別に与えられた恩恵をどのように受け止めるべきかと自問自答の末、戦争犠牲者彼我一切万霊供養と世界平和祈願をこめた「中尊阿弥陀如来像」を織り上げ、昭和26年に全日本仏教徒の総意としてニューヨーク国連本部に贈呈した。100 歳になる秋野は今なお健在で、元気に世界平和を叫ぶスーパーレディである。

戦争で引き裂かれた

日米離散家族の万祝

明治期より渡米・移住した房総アワビ漁師たちの万祝（晴着）。背中には日米の国旗とUSAの文字が染められている。戦局が悪化すると、在米の家族を案じながらも、非国民の非難を逃れるため手紙や写真とともに隠匿された。戦後 60 年を経て光があたり、子孫たちが交流を始め墓参を果たしている。

本土決戦抵抗拠点

地下壕に掘られた天井の龍

本土決戦間近の昭和19年12月に竣工した128高地の地下壕には、「戦闘指揮所」「作戦室」と彫られた額とともに、天井に彫られた龍が鮮やかに残っている。動員された美校生らの作品なのかは定かではないが、全国でも珍しい戦争遺跡である。福祉施設内のため一般公開はされていないが、後世に残したい歴史遺産である。

平和を願うハングル「四面石塔」と「噫(ああ)従軍慰安婦」碑

江戸初期に館山の大厳院に建立された「四面石塔」の東西南北各面には、朝鮮ハングル・印度梵字・中国篆字・和風漢字で「南無阿弥陀仏」と刻まれている。秀吉の朝鮮侵略を乗り越え、戦没者への供養と平和祈願をこめられたものと推察され、現在、この碑をめぐる日韓友好交流がおこなわれている。

婦人保護施設「かにた婦人の村」の丘上には、戦後 40 年に建てられた「噫従軍慰安婦」碑がある。日本人でただ一人、勇気ある慰安婦体験を告白し、世界中の慰安婦問題の発火点になった。 「噫」は言葉にならない苦しみを表わす文字であり、「南無」にも同じ思いがこめられていることを語り継ぎたい。

ふる里と無言館

上田市出身　彫刻家　船田正廣

上田盆地の北の隅、下塩尻字中島という集落で私は生を受けた。７歳のとき終戦となったので、本当の苦しさや、激戦といった経験はしていない。自分の家族が食べるだけの田畑は小作として与えられていたが、毎日おそう空腹感と百姓仕事の大変さは、身に滲みて感じていた。そんな村に、私たちが絵描きと呼んでいた本堂守先生という方が居た。「絵描きなんかじゃ食べていかれない」「そんなことやってたら家が潰れる」と大概の村人は言っていた。私より 20 歳ぐらい年上だったとおもう。どこかの中学校で美術の先生をしているということは聞いていたが、たまに村に帰って来られる姿をみかけると遠くから奥様と仲良く手をつないでやって来たりするものだから、家の硝子戸の中からちらっと覗き見る程度だった。

本堂先生は戦後間もない頃、うちの近くの道端に、イーゼルを立てて、同じ山の風景を、小品と少し大きめの２点つづけて描いていた。何日もかけていたので、一度描いているところを覗きにいった。近景に見える半過（はんが）の若鼻、中景のトッコウ山、一番遠く高い位置には信濃富士と私たちが普段呼んでいる山が描かれていた。私が最も驚いたのは、信濃富士が薄紫に塗られて一番遠い感じを出していたことだった。私にはどう見ても、信濃富士は紫には見えなかった。絵描きの目は、普通の人とちがうんだとその時から思った。本堂先生は細い目をさらに細めて、イーゼルから離れたりまた近づいたりして描き、とうとう無言のまま去っていった。今でも帰省すると家の手前で昔と同じ形の山々がそのまま変わらぬ構図で待ち受けてくれる。家には父も母も、そして本堂先生ももう居ない。本堂先生は画業半ばにして、戦争に行ったのかも知れない。そして生きて帰ってあの生活難の中で村の姿をとらえようと試みていたのかも知れない。

私は故郷を離れて館山に来て、何十年と経ってから、小さい頃呼んでいたトッコウ山は密教法具の独鈷と書くこと、信濃富士が蓼科山であることを識った。数年前には塩尻地区千曲川上手に新しい大橋がかかり上田原まで歩いても 30 分程、真田の古戦場跡も直ぐ近い処となった。窪島誠一郎氏は戦後 35 年目に「信濃デッサン館」を、そしてそれから 18 年後に戦没画学生慰霊美術館「無言館」を、独鈷山の裾に建てられた。私が小さいときから毎日眺めていた独鈷山の根本、家から歩いても１時間ぐらいの塩田平だ。地上には、いたましく生々しい戦争遺跡と、平和を願う文化遺跡が重なって存在することが多く皮肉である。

上田生まれの私が、縁あってここ館山に住んで 45 年になる。無言館には千葉県関係の人の作品が 10 点近くあり、館山海軍砲術学校所属の画学生の遺作もあると聞く。軍都だった館山には、平和の大切さを物語るアジア太平洋戦争の遺跡が多く残っている。私の同僚だった愛沢伸雄氏が、平和学習に活用するため始めた調査や保存運動に市民が賛同し、市によって赤山地下壕が一般公開され、市史跡となった。さらに重要な戦跡と「噫従軍慰安婦」石碑がある婦人保護施設「かにた婦人の村」は、今なお平和を希求する活動を続け、生きる文化財と言える。願わくば、上田市と館山市が姉妹都市になってもいいのではないかと私は思っている。窪島氏にも、ぜひ館山の戦争遺跡を歩いていただき、戦没画学生の姿の跡に出会われて上田にお帰りになられることを、心から願っている。

生命を育て、守るために

第 15 回安房地域母親大会　実行委員長　田中房江

数年前、無言館を訪ねて、画学生の絵を見たときに、戦時中小学生だった私が、出征していく若者を近所の人たちが日の丸の旗を振りながら、歌をうたって送り出す、出征兵士を送る会が連日行われていたことを思い出しました。送る側は元気で、にぎやかだったのに反し、送られる若者の後ろに立つ母親や、姉妹達が目にいっぱい涙をためていました。自分が親になって、別れがこんなにつらく、悲しいことだったか、絵の前で胸がしめつけられました。私の兄も美しい恋人と結ばれることなく、ニューギニア戦線に散りました。戦争は有為な若者達の人生を奪ったばかりかその家族をも不幸にしました。

1955 年日本の婦人の呼びかけで世界母親大会がスイスで開かれ「生命を生みだす母親は生命を育て　生命を守ることをのぞみます」をスローガンに「世界の母親・女性が手をつなぎ、核戦争から子どもを守りましょう」と誓いあいました。アフリカのリベリアでも長年の内戦を女性の力で収め、初の女性大統領を実現させました。アメリカのオバマ大統領も核兵器廃絶を誓い、世界によびかけました。この講演会を機に、世界から核兵器を廃絶し、飢えと戦争のない世界を一日も早く実現したいと願っています。

無言館見学記（2009. 4. 7. ～8. ）

年金者組合安房支部　高島幸夫

これが最後の見学の機会、と思いながら見ていくうち、次々とこみ上げてくる。“涙を流すまい”の努力で、これまで経験したことのない激痛が瞼の裏にくる。やりすごしても、続いて何度も見舞われる。この繰り返し一時間あまりで、やっと館外へ。

『編みものをする婦人』（下図）＝興梠武（木更津出身　45. 8. 18 戦死）
『奈良唐招提寺』　＝永江千秋（杉並出身　45. 6. 10 沖縄で戦死）
『街』　＝片桐　彰（長野出身　44. 7. 28 マリアナで戦死）
『婦人像』(ﾌﾞﾛﾝｽﾞ）＝小柏太郎（島根出身　館山砲術学校→45. 3. 15 フィリッピンで戦死）
『奈良･高畑の道』　＝伊藤守正（東京出身　46. 9. 25 戦病死　入営前日の作品）

「帰ったら続きを描くから」と言い残し、そのまま遺作となった「裸婦」ほか、強烈に訴えかける作品の集積。

「無言館を平和・反戦一色でとらえてほしくない」という意味合いの窪島さんのことばを、ていねいに受け取る必要を改めて思った。また、３回目の最後の見学になるであろう私には、窪島さんの「戦没画学生“石村日郎・靉光”のこと」の末尾“どんなに戦火が高まる戦時下にあっても、「絵を描くこと」しか考えずに生きることこそが、正真正銘かれらについての「反戦」の姿勢であった。…”が、格好の手引きの言葉となった。

共催団体

第 15 回安房地域母親大会実行委員会
（新婦人鴨川支部、同館山支部、市町職員組合連絡協議会安房地区女性連絡会、
全日本年金者組合安房支部、ＮＰＯ法人安房文化遺産フォーラムで構成）
ＮＰＯ法人安房文化遺産フォーラム

後援団体

館山市・南房総市・鴨川市・鋸南町の各教育委員会
館山美術会、安房ビエンナーレ協会、安房･平和のための美術展実行委員会、
平和を願う千葉県美術家の会、千葉美術･九条の会、光陽会南房総支部、
千倉絵画同好会、新風美術会、安房反核フェスティバル、館山ユネスコ協会、
安房地区高校退職教職員の会

呼びかけ人（50 音順）

愛沢 伸雄(NPO 法人 安房文化遺産フォーラム代表)、池田恵美子(同　事務局長)、
石井 純(陶芸家)、斉藤陽子(安房母親大会事務局長)、柴﨑孝雄(館山美術会会長)、
高島幸夫(年金者組合安房支部執行委員)、田中 房江(安房母親大会実行委員長)、
富樫 研二(陶芸家)、橋本 新子(華道家)、橋本 芳久(年金者組合安房支部長)、
早川 厚子(画家)、平本 紀久雄(千葉の海と漁業を考える会代表)、船田 正廣(彫刻家)
穂積 節夫(美術家)、本多　馨（館山ユネスコ協会会長）、溝口 七生(画家)、
三平 忠宏(歌人)、山口 栄彦(エッセイスト)、山口 マオ(画家)

…絵を描きたい！それだけの望みも断たれた人生があった…

無言館ブックフェア

・『無言館』講談社　￥1,575 -
・『無言館を訪ねて』講談社　￥1,575 -
・『無言館の詩』講談社　￥1,575－
・『戦没画家　霧光の生涯』新日本出版社　￥1,890－
・『「無言館」ものがたり』講談社　￥1,470－
・『無言館の青春』講談社　￥1,575－
・『無言館の坂を下って』白水社　￥2,310－
・『「無言館」への旅』白水社　￥1,995－
・『「無言館」の坂道』平凡社　￥1,890－
・『無言館ノオト』集英社　￥798－
・『無言館にいらっしゃい』筑摩書房　￥777－
・『遺された画集』平凡社　￥1,575－

『あわがいど・戦争遺跡』ＮＰＯ法人安房文化遺産フォーラム　￥600－
『戦争体験集～安房にも戦争があった』安房反核フェスティバル実行委員会　￥500－

宮沢書店 本店

TEL:0470－23－7771
期間:6月20日～7月20日

●本日の講演終了後、ロビーにて著書のサイン会があります。